

FLUX（流れるようなライン）

ジュネーブの MB&F M.A.D. ギャラリーにて Auto Fabrica（オート ファブリカ）の Type 6 と Type 8 を展示

ジュネーブの M.A.D. ギャラリーでは、永田力とマクスウェル・ハザンの作品展の好評を受けて、アートモーターサイクルに関する新たな展覧会を開催する。この発表からわかるように、M.A.D. ギャラリーの設立者マキシミアン・ブッサーは、現代における最も美しいオートバイの 1 つとして専門誌に絶賛された Auto Fabrica の Type 6 に心惹かれていたのである。

M.A.D. ギャラリーでの展示を打診されたブヤルとガズメンド・ムハレミ兄弟は、すぐにその申し出を快諾し、兄弟が経営する英国のブランド、Auto Fabrica が誇るイマジネーションあふれるオートバイの中から 2 台を展示することとなった。今回の協力は、機械とオートバイのデザインに対する共通の情熱によって、ごく自然に実現したのである。

ロンドンに拠点を置くこの若い企業は、「余計なものが少ないほど良い」という原理に従っている。雑多な装備を削ぎ落してシンプルなマシンを作り上げることが理念にしている。Auto Fabrica の 2 つ目のモットーは、ヴィンテージバイクをベースにした「オールド」スタイルの作品に現代的なデザインを採り入れることであり、昔ながらの技術を活用しながら新しいパーツを製作するという方法でこれを実現している。これによって、同社のエンジン駆動マシンに独創的な外観と印象が生まれるのだ。

また、この英国の 2 人組がデザインを作り変えて製作したオートバイは、まるで最高級の時計のように実に美しく仕上がっている。

インスピレーション、手法、プロセス

ムハレミ兄弟は、1910 年から 1980 年代にかけて製作された最も美しく高級な車とバイクからインスピレーションを汲んで作品に活かしている。年代として挙げるには非常に長い期間のように思われるかもしれないが、彼らの作品に大きな影響を与えるようになったのは、このかつての 70 年間に製造された素晴らしいデザインの車やバイクなのだ。フォントナやピニンファリーナなどのブランドの作品からも刺激を受けたが、多くの場合において重要なインスピレーションの源となったのは、エットーレ・ブガッティの美しく芸術的な自動車デザインであった。またブガッティの仕事のスタイルにも影響を受けたムハレミ兄弟は、自分たちが製作した見事なオートバイのモデル名に「タイプ」という言葉を使うようになる。

この兄弟が採用しているプロセスでは、まず彼らが「ドナーバイク」と呼ぶヴィンテージバイクから余分なものを取り除き、必要最小限のシンプルな形にしてから、そのオートバイに彼ら自身が製作した多くのパーツを装備する。但し、バイクの可動部はできる限り「隠し」、最終的には、3 つの主要なコンポーネントグループ、すなわちフレームと車輪、車体、そして排気管を備えたエンジンのみが外側から見えるように仕上げる。

Auto Fabrica はこのような手法でシンプルな外観のマシンを実現し、そのスタイルによって人々に知られるようになった。この手法から得られた「収穫」は、兄弟が、手作りのタンクやシートといった希少になりつつあるヴィンテージマシンの製造技術を学び、その一方で、安定性や耐久性を高めるために最新の素材を採用したということである。

しかしバイクのどのパーツにしても、それを手にする前に、ブヤルと彼のチームはパーツの設計にかなりの時間を割く。つまり、手作業でのスケッチから、Photoshop でのレンダリング、そしてバイクのバーチャルモデルの作成を経てようやく、彼らが情熱を注ぐ手作業の製作を始めることができるのだ。

そして、常に「余計なものが少ないほど良い」という理念を念頭に置いて製作に励んでいる。

マシン

Auto Fabrica では毎年、その精巧なオートバイを非常に限られた台数、通常は 8~12 台のみ製作している。M.A.D.ギャラリーでは、ムハレミ兄弟が作った 2 台のマシン、Type 6 と Type 8 を展示するが、これらはいずれも製作に約 6 か月を要している。

Auto Fabrica の Type 6 は、1979 年式のヤマハ XS650 の残存パーツから生まれた。兄弟によると、この特別なオートバイを設計した時から、特徴的なディテールによって全体のフォルムが決まるようになったという。すなわちこのマシンでは、シートに接触するタンク後部が貝殻のようにカーブし、トンネル状にくりぬかれているという点である。この製作が難しい部分によって、オートバイ全体の形状が決まることになったのだ。当初の設計では、開口部をラムエアインテークとして使用することを考えていたが、これは、デザイン上の制約に妥協しなければ実現できないことがわかった。そこで、シンプルなラインを生み出して保つため、手作業で成型したアルミニウムを手動で圧延し、タンクとシート基部を一体化して製作した。

原型となったヤマハのマシンには、Auto Fabrica が自社製造したステンレススチール製のハンドルバーやレバー、フォークカバーなど、細部の部品が加えられている。ムハレミ兄弟は「当社の自慢は、手作業で作り上げたステンレススチール製の排気システムです。」と誇らしげに語る。

もちろん、0.5mm のオーバーサイズピストンを用いてエンジンも全面的に改装。ベアメタルをマットに仕上げることを好む彼らは、鋳造部品とアルミニウム製部品の表面をアクアブラストで処理している。

シンプルなデザインは、正確に実現しようとするれば、かなり難しいことが多い。それは、ムハレミ兄弟が製作するオートバイのフォルムにも言えることで、実は非常に複雑であるがゆえに、シンプルに見えるのである。Type 6 は、この「複雑さによって表現されるシンプルスタイル」を示す絶好の例であろう。

彼らは Type 6 と同時期に、1981 年式のホンダ CX500 を原型とする Type 8 の製作にも取り組んだ。このもう一つのマシンは Type 6 とは外観が全く異なるが、それには正当な理由がある。Type 8 の製作時に外装を取り去ると、奇妙なものが現れたのだ。「むき出し」状態になったフレームは、（現在では全面的に改装されている）エンジンの上に横たわる実に有機的なフォルムで、これは 1980 年代の日本製バイクでは珍しいことだった。このことから、手作業で成型したアルミニウム製タンクをフレームの延長部分として使用するなどの、新しいアイデアが生まれた。そして、ステンレススチール製の排気管を高め位置に取り付けるという独自の挑戦ともいえるディテールによって、バイクに独特の外観を演出した。こうして、流れるようなラインが特徴の Type 8 が誕生したのである。

来歴

ガズメンド・ムハレミは、英国のアングリヤ・ラスキン・ポリテクニク大学でプロダクトデザインの学位を取得した。弟のブヤル・ムハレミはコベントリー大学で自動車デザインの修士号を取得し、Auto Fabrica を経営する前は、スーパーカーメーカーなどの顧客のための仕事や、眼識ある熱心な個人顧客向けの特注デザインのプロジェクトに携わっていた。

コソボ出身のムハレミ兄弟は、幼い頃から自転車に乗り始め、その後はメカニカルサイクルでのツーリングに熱中していた。彼らはその好みや専門分野から、既存のオートバイを改良して、より優れたマシンを作ることができると考えた。

そしてこう語る。「Auto Fabrica の中核を成す精神は、複雑さの中でシンプルなスタイルを追求すること。つまり細部は非常に複雑でありながらも、不要なものを削ぎ落としたシンプルなマシンを実現することです。」

Auto Fabrica が正式に誕生したのは 2013 年だが、兄弟は、自動車やバイク、航空機などの機械やアートに対する共通の情熱によって同社が設立されるまでには「長い時間がかかった」と力説する。ガズメンドとブヤルは若い頃から、自分たち自身のマシンで様々なプロジェクトに取り組むことで自信を高めてきた。やがて彼らは、自分たちが望んでいるデザインを実現する最良の方法は、複雑な形状やエンジニアリングを駆使してシンプルなスタイルを表現することであると確信する。つまり、外観がシンプルだからといって、彼らのマシンが実際に単純だというわけではないのだ。

兄弟は次のように説明している。「私たちはまず、最新技術から一步離れて、美しいマシンとは何か、ということを実験的に研究しました。その結果、何度も同じ結論に達したのです。すなわち、最も美しく高級なマシンとは 1910 年から 1980 年代にかけての黄金時代に製作された車とバイクである、と。」

このことを念頭に置いて 2 人の兄弟は、車体の手作りなど、マシンの製作方法について分析した。そして、完全に左右対称でなくても流れるような自然なラインの美しいデザインが生み出せる、と考えるに至った。そのため Auto Fabrica では、パネルビーティング（板打ち）や金属成形といった、自動車業界では消えつつある手作業の技術が重要な要素となる。彼らは、試行錯誤を繰り返しながら独学でこれらの技術を学んだのである。

そして、コーンウォールの田舎の農場で幸運にも 4 台のヤマハ XS650 モデルを発見し、それらを 4 台のクラシック「ドナーバイク」として彼らの製作のベースに活用したことが、この若い会社の発展につながった。それ以来、彼らの事業は順調に展開しているのである！